

戦時体制と敗戦

これまで、1895（明治28）年に台湾が日本の統治下となつてから台湾において天理教がどのように布教を展開してきたかを、さまざまな視点から論じてきた。しかし、日本による統治も1945（昭和20）年の敗戦によって終焉を迎えることになる。そこで、今回は戦時体制から敗戦へと連なる台湾社会の状況と天理教について紹介したい。

1931（昭和6）年9月に満州事変が起こり、翌年3月には「満州国」が建国されたことで日中関係は悪化の一途をたどり、さらに1933（昭和8）年3月に日本は国際連盟を脱退し、国際社会で孤立を深めていった。そして1937（昭和12）年7月に盧溝橋事件が勃発し、日中戦争（支那事変）へと発展した。このように日本が戦争への道を突き進む中で、日本の統治下にあった台湾も、否応なく戦時体制の中に組み込まれていくこととなる。まず、それまでの文官総督制に代わって武官総督制が復活し、1936（昭和11）年9月に予備役だった海軍大将・小林躋造が総督に就任した。小林総督は、台湾人の「皇民化」、台湾産業の「工業化」、台湾を東南アジア進出の基地とする「南進基地化」を、台湾統治の基本とすることを表明した（伊藤潔、125頁）。

総督府によって推し進められた「皇民化政策」による官民挙げての社会・文化運動は「皇民化運動」と呼ばれ、国語運動、改姓名、志願兵制度、宗教や社会風俗の改革などが行われた。この内実は「台湾人の日本人化」であり、その背景としては、長引く戦争によって、日本の人的資源が枯渇する中で、日本の統治下である台湾に頼らなくてはならなくなったことがある。

国語運動は日本語の使用を推進する運動で、各地に日本語講習所が設けられ、日本語家庭が奨励された。日本語家庭とは家庭においても日本語が使用されるというものである。その過程で閩南語・客家語・原住民諸語の使用は抑圧され、また制限された。そして新聞の漢文欄が廃止された。

改姓名は朝鮮のような強制ではなく許可制であったが、日本式姓名を持つことが進学や昇進など社会的地位の上昇に有利にはたらく場合もあり、改姓名を行った台湾人もいた。

台湾に在住する内地人は以前から徴兵対象であったため、天理教の教会長や後継者も出兵することになった。日本と中国が戦争をしているため、中国に出自を持つ台湾の漢民族を兵士として採用することには反対が多かったが、兵力不足からやむをえず台湾人を対象とする志願兵制が開始され、ついに1944（昭和19）年9月には徴兵制が施行され、翌年4月から全面的に開始された。戦争に駆り出された台湾人の軍人は80,433名、軍属・軍夫は126,750名で合計207,183名、そのうち戦死および病死者は30,304名に上った（伊藤潔、131頁）。

台湾の宗教や風俗は、日本風なものに「改良」することが試みられた。具体的には伝統的な寺廟が取り壊されたり、神社に改築されたところがあった。また神像を集めて燃やし、昇天させることもあった。これらは「寺廟整理」と称される。詳細は宮本延人（1988）を参照。従来の中国風の結婚や葬式は日本風な神前結婚や寺葬に改められ、各家庭に神宮大麻（天照大神の神札）を配布し、祀ることが推進され、定期的に神社参拝するよう強要された。さらに、「壮丁団運動」や「部落振興運動」

などにより集落を単位として労力を動員し、公共工事、軍事施設建設、共同生産に従事させることもあった。このように皇民化は、「台湾人の日本人化」にとどまらず、戦時体制の完成と戦争遂行に向けて全台湾人を動員する大々的運動であった。

太平洋戦争開戦の前年にあたる1940（昭和15）年10月、第2次近衛内閣は「大政翼賛会」を発足させ、これに呼応して総督府は海軍大将・長谷川清総督の下、1941（昭和16）年4月19日に「皇民報公会」を設立させた。これは戦時体制の強化と台湾人の皇民化をさらに推進させることを目指したものであった。

天理教教会本部では1940（昭和15）年4月の「宗教団体法」の実施を受けて、教規改正が行われ、従来天理教内に組織されていた婦人会、青年会、教師会、健児団を統合し、「天理教一宇会」が結成された。翌年の発会式には3万人の会員が集結した。組織は庶務、男子、婦人、少年の4部から成り、教会本部教庁に中央部、各教務支庁、管理所、伝道庁に支部を設置した。これ以降、一宇会を中核として、炭鉱ひのきしんをはじめ、さまざまな活動が展開されたが、組織も活動も戦時体制下で国策に沿うべく強制されたものであった。

日中戦争勃発後、軍部の要請により、中国や台湾の軍施設へ教会本部から「天理教愛国少年団」として天理教の信者子弟が派遣され、天理中学校、天理外国語学校の生徒のみならず、内地の教会子弟はもとより、台湾の信者子弟も動員された。1938（昭和13）年2月の北支派遣にはじまり、この年に260人ほどが派遣された。同年末には中支、翌年には、台湾、太原、蒙疆、包頭、北京に派遣された。現地で言語を学び、その後、通訳や宣撫官に就いたようである。台湾から中支へ派遣された少年たちは現地で集団生活をしながら、軽作業を行った。

しかし、その後戦況は悪化し、1943（昭和18）年11月25日にはアメリカ陸軍と中国国民革命軍の連合部隊による新竹空襲を受け、さらに太平洋戦争末期になると台湾各地で空襲を受けるようになった。新竹、基隆、嘉義、彰化などの天理教教会が空襲で被災したり、空襲を逃れるために疎開するなどした。1945（昭和20）年5月31日には連合国軍の爆撃機による台北空襲を受けた。これは無差別爆撃であったため、約3,000人の市民が死亡し、重軽傷者と家屋を失った者は数万人に上った。この空襲によって、台北市内の多くの天理教教会も被災した。

戦況の悪化が続く中、同年8月6日に広島、9日に長崎に原爆が落とされ、日本はポツダム宣言を受諾して無条件降伏し、ついに8月15日の玉音放送によって第2次世界大戦がようやく終わることになった。そして日本は連合国軍の占領下となり、50年にわたる台湾統治を手放すこととなった。

[参考文献]

- 伊藤潔（1993）『台湾 四百年の歴史と展望』中央公論社。
黄昭堂（1991）『台湾総督府』教育社。
天理大学附属おやさと研究所編（2018）『天理教事典 第三版』天理大学出版部。
宮本延人（1988）『日本統治時代台湾における寺廟整理問題』天理教道友社。